505
39

日蓮主義ノ文化叢書ニ

文化ノ一ニ日蓮主義

始

文化としての日蓮主義

505-39

文化としての日蓮主義

星野・梅耀

寄贈本

(日蓮主義文化叢書第一編)

大正
11. 5. 1
寄贈

第一節

新らしき時代の問題は、いかにして多數民衆の實生活を向上せしめるかの努力にその重心を置かねばならぬ。今日はたゞ漫然と獨善の道德を叫んでも駄目だ。獨善の人道主義を唱へ、獨善の世界平和を叫んだものは數あつたが、これが爲めに多數民衆の實生活は過去に於て一歩も進めらるゝ事はなかつた。かくの如き空砲の音響に依賴すべく現代は餘りに科學的であり現實的である。

いま、我等の周圍に漂ふ不安の空氣、焦躁の空氣、赤化の空氣をかへり見れば、これ實に「苦悶の生命」そのものである。世界は斯く悶えつゝある、日本はかく惱みつゝある。大戰は終つた、砲彈の戰ひは終熄した。そして、そのあとに、怖るべき「生活の內亂」が現はれんとしてゐる。現代を呪ふ聲はこがらしのやうに街頭に鳴つてゐる。

元來すべての宗教はそのはじめ苦しめる民衆の苦悶の聲から生れた。すなはち、すべての宗教的偉人は、彼等の眼前に見る同胞の、憔かれんとする焰、瀕れんとする水を處理することの爲めに現はれた英雄である。故に宗教は苦しめる時代に於て最も大きく輝くものである。同じく又、如何なる理由と口實とを以てするも、時代と社會をはなれ、多數民衆の實生活と沒交渉なる宗教は、あきらかに過去の遺物たるにすぎない。既に用を終り目的を遂げたるものゝ、たゞ無意味なる存續であるにすぎない。

今の世に、宗教と名乘るものゝ大部分が、精神的偶像の殿堂であるか、然らざれば微溫なる道德の巢窟であるか、多くはそれ以上の何物でもないことは、光輝ある實生活に生きる現代人をして、無宗教無信仰を叫ぶに至らしむるも又當然の結果である。

○こゝに於て、新しき宗教は、新しき生命を提げて現代の多數民衆の生活を支配せんとする宗教は、新しき運動を以て、力强く多數民衆の生活それ自身に近づいて行かねばならぬ。

そうして、その說く所、その敎ゆる所は、道德の上に權威あると同時に科學の上にも權威あるものでなくてはならぬ。また精神上の煩悶を解決すると同時に、かゝる煩悶が發し來たる所以の生活的原因に向つても研究と解決を進めねばならぬ。それは我等が傳統的にまた因習的に呼び來つた、いはゆる宗教と甚だしく趣を異にすると

ころのものとなるかもしれない。舊き宗教家、或は舊き宗教學者は言ふであらうこれは、「宗教」と言ふ事は出來ないと。然らば、我等は躊躇なく、これを命名して新しき「文化」と呼ぶであらう。生命なき空名の「宗教」をすてゝ、直接我等の世界と、我等の生活に光輝ある未來を與へる新しき「文化」を迎ふる方が適かに大なる意義がある。

第二節

日蓮主義は、日蓮聖人によつて見出された眞正の佛教である。日蓮聖人が、それを以て、當時の社會を改造し、同時に、それを以て人間生活の永遠の苦悶を救はんとした宗教である。それを我等の時代に適用して、其の價値の一貫せるを認めんとする努力には新らしい意義と價値を認めないわけにゆかない。その新らしい努力が、明治となり田中智學先生等の先覺によつて始められた日蓮主義の文化運動である。日蓮主義が、日蓮宗の現代的稱呼、或ひは、其の內の自由信仰家の一團と解されることは非常な誤りである。併し乍ら、その誤りは實際に於て少くない。ゆゑに、「日蓮主義」はますゝその誤りから遠ざからなければならない。その誤りから遠ざかることは、即ち、現代の多數民衆の生きた生活に向つて折づくことである。

○漫然たる人道主義や平和思想が現實暴露の悲哀を避けることの出來ないのも、また、寺院と敎會の宗教が組織的なる現代の矛盾と苦悶とに何の力を發ひ得ないのも、その係はるところは一つである。すなはち、知るものに

非ざれば爲すあたはず、近代の人間苦、社會苦は自ら苦しむものが、立つて救ひの道を講ずるにあらざれば、治まらないのである。ブルヂョア的道學者や、隱遁的又は夢遊的宗教家のきまり文句の說教によつて救濟されるべく、あまりに實人生は眞劍であり、あまりに現代の生活は複雜である。

たゞ、舊き道學と、舊き宗教との代はりに、新しき「文化」がある。新しき文化は、我等の生命を育てる酸素であり、蛋白質である。

文化としての日蓮主義を考察し理會し、宣傳することは、かくして頗る緊要な問題であると思ふ。文化は我等の全生活の支配者ではないか。宗教は過去の文化であつた。文化は現代の宗教である。現代人の信仰は、如何にして、我等の內部外部の生活を充實し、創造の自由を擴大しやうとするやるせなき希願と苦鬪とである。よし、それは異端であつても或は邪道であつても、又、過去の信仰に比べて、餘りに苦しい努力であつても、我等の世界の「時」は逆流することを許さない、生命躍進の流れは、つねに新しき未來へと進むのである。後に戻すことが出來ないと同時に、現在に止めることも出來ない。たゞ、これに對する保護の方法としては、去きに向つて誘ふところの努力の外はない。接觸である、同情である、理會である、そして完全なる同化である。完全なる同化が社會と文化との間に結ばれるならば、社會はそれ自らの前進に當つて、おのづから方向を選ぶであらう。それ以上の保護はない、それ以上の安全はない。

「無間地獄の道を塞ぎぬ」。日蓮聖人がその同胞のすべてを愛した愛の深さと大きさは、地獄への道を謝斷する努力であつた。地獄の道を塞ぐ、これ以上の人類愛はない。これ以上の道德これ以上の政治、これ以上の教育、これ以上の生活向上はない。

道德の理想は無道德であり、宗教の理想は無宗教である。「自ら帝の法にかなふ」に至り、「心の欲するところに從つて法を越えず」の境地に達すれば道德の意識斷はもはや人を煩はさない。道德の理想はかゝる境地に行きつく事である。宗教も「佛と等しくして異ること無からしめ」此の三界を如實に知見するに至れば、特別なる宗教生活といふものを必要としない。このやうに、教養の學問は同化作用を忘れては殆んど意味をなさない。我れに美しきものあらば、それを以て醜きもの汚れたるものに同化し、進んで完全に同化し了るとき彼れを忘れ我れを忘れなければならぬ。宗教の文化的意義は全き生命の同化である。

政治の理想は何であるか、教育の使命は何であるか、畢竟するに此の世の中から地獄い生活を絕滅することでなければならぬ。無間地獄の道を塞ぐことが、人間政治の理想であり、文明教育の目的とする所である。

現代の生活に於て、政治も知らず、教育も見ず、藝術も顧みず、社會文化を全然よそにして、獨善的宗教と道

憶とは何を爲さんとするか。斯くの如きは遠い昔の夢から未だ少しも醒めてをらぬ證左ではないか。

第三節

日蓮主義文化運動は、現代の生活苦そのものゝ要求から生れ、現代の文化生活そのものと積極的交渉をもつものでなければならぬ。

神秘なるものゝ價値はその還元作用にある。時間と空間を超越せのものは、必要に應じていつでも、特定の時間と空間に向つて還元する事が出來なくては何の價値も權威もない。時代生活の組織を超越した宗教の生命は、必要に應じていつでも時代生活を支配する文化となつて活くべきである。その能はざるものは既に目的を遂げて了つた殘骸であつて、それはもはや文化的能力のないものである。

法華經の神秘を廿世紀の人間世界に飜譯し、日蓮聖人の天才を現代凡俗の生活に適用し來つて、そこに新らしい生命の躍動を見る事が出來なければ、宗教に永遠の生命を認める事は出來ない。日蓮主義文化運動はこゝに於て全く新らしい一個の文化として日蓮主義を取り扱はねばならぬ。

現代の空氣を呼吸して生きてゐる我々にとつて最も權威あるものは日蓮主義の文化價値である。換言すれば、現代生活と對照して見たる日蓮主義の哲學である。

新らしき日蓮主義の文化價値は、現代生活の苦惱がこれを發見するのである。日蓮聖人滅後六百年、未だ聖人の一乘佛教が、その哲學を以て實際に、我が國の文化に參與した事はなかつた。それは一つは、國家及國民の生活があまりに低級なる爭奪と諦めの歴史でつゞけられたからでもある。人間生活の僞らざる苦惱の聲が現代のやうに痛激に、そして又組織的に鳴り響いてこそ、生命の宗教はその底に匿されたる本化直統の文化を蘇へして來るのである。かくて復活せる新しき日蓮主義文化は、もはや團扇太鼓の題目とは全く其存在を異にする所の我等が實生活の原理である。

第四節

現代に適用することが出來なければ宗教の價値はちやうど煙の出ない火山のやうなものである。煙の出ない火山には二種あつて火山としての生命はあるが、噴火を休んでゐる休火山と、全然、火山としての生命を失つた死火山とがある。現代に宗教を名乘つてゐるものであつても、その實質は死火山になつてゐるものがある。日蓮主義が新しい鳴動を開始するまでは日蓮宗の如きは休火山であつたのだ。日蓮主義はいまや鳴動から噴火に移らねばならぬ。鳴動だけでは未だ活火山の威力を充分に發揮するものではない。その噴火は最早この上、教學の論談でもなく宗門の改革でもない。日蓮主義そのものゝ實質が、化生活の中へ向つて闖く而も強く具體的に侵入してゆく事

である。換言すれば、主義の具體化であつて、生活の形式の上に具體的變化を起すところの新らしい文化運動に進むのである。

今日、宗教の存在が如何なる意味に於て國家及び社會から認められてゐるか、最も消極的の意味に於てと言はざるを得ないのだ。國家が宗教を認め、專門宗教家を認めてゐるのは、其教化によつて社會の人心を幾分道德化する事が出來るといふ位の信賴にすぎない。現内務大臣床次氏は、しば〳〵宗教家のみの席上に於て、國家が宗教家に期待するところは、ひたすらその道德的教化にある旨を說いてゐる。元來宗教の本領から言つて、道德的教化力の如きは、そも〳〵末の問題である。今日の宗教はその本領に於て認められずに道德的教化力のそれも心細い實力が形式的に僅かに認められてゐるに過ない。しかも誰あつて之れを拒む事の出來ない狀態にある。それが動かすことも隱すことも出來ない事實だから仕方がない。道德の一點に於て宗教が認められる。何といふ哀れなことだ。苟くも宗教と名附けられるものに惡事をすゝめるものがあらうはづはない。たとへ多少なりとも善行を心がけるやうに教へるには違ひないのだ。その點ばかりが、現代宗教の公定相場であるとは何たる宗教の衰滅であらう。又墮落であらう。すなはち、死火山のゆゑんである。

ひとり日蓮主義がこの不甲斐なき公定相場を振り離して鳴動をつゞけ、今まさに、大正の國民生活の中に爆發する順序にまで進んでゐる事は大なる異彩である。爆發は即ち現代への適應に於てその價値を發揮することである。文化組織への突貫である。文化組織とは何ぞや、宗教もあれば政治もあれば、產業もあれば、藝術もあれば、科學もあれば、我々の全生活を包みつゝ廻轉してゆく復雜なる組織である。而も日に日に新なる力である。日蓮聖人が六百年の以前に於て先づ當時の生活を改造するために示した原理が、原理として、現代に適用することに於て何れだけの文化價値を實現するものであるかを現代の日蓮主義者は實證せねばならぬ。

第五節

生命の原理に適合した生活の改造が文化の第一歩であるならば、文化生活は先づ政治をよく了解して、その政治生活の基礎の上に立たねばならぬ。人間としても、又國民としても、人が自個の運命に對して責任をもち得ないやうな政治の下にあつては文化生活は成り立たないのである。個人の生活が協同の生活と必然的調和關係を結んで、全體としての組織の改善が直に個々の生活の改善を實現するところに眞の政治はあり、而して又眞の文化はある。日蓮主義は先づ政治についてはは深い理解をもたねばならぬ。つねに組織の本源に向つて改造の輪を廻轉するところの道に進まねばならぬ。その意味に於ては、近代の政治學又は社會改造學と一致するところもある。人生に多くの矛盾があり、世の中に不幸のものが絶えないといふことも罪人がふえるといふ事もそれは、個人の罪

でなくして社會の罪だ、社會組織が悪いからだと近代の社會學者はいふのである。組織を改めなければ、いくら一人〳〵の不幸ものを救濟してやつても、後から〳〵と無限に出て來るもの〻處分がつかない。この組織改造の論理を一から十まで物質的關係の上に於て取り扱ふものが社會主義的政治方針である。だから社會主義は理想としては充分に價値のあるものであるが、理想と現實との間の溝を破壞によつて埋めやうとするらしい、その手段には適應を拒むところの幾多の離點がある。社會主義が組織改造論であると同じく、日蓮主義も組織改造論である。前者は物質に始まつて物質に終るが後者は精神に始まつて物質に現はれる組織である。物質的條件から多くの罪惡が生み出されることは事實だ、しかし、物質的條件の滿足だけで、此の世が完全圓滿の平和の淨土になると思ふならば、これも新らしい近代人の迷信である。人間の欲望には限りがない、充たしても充たしても擴大する空虛の心を何としやう。

近代生活にあつては物質的境遇を正當のものにする努力をかへりみずして唯心的教化說法のみで社會生活の安固充實を圖ることは無謀である。それと同時に、この新らしい追加條件に囚はれて、物質的條件のみが、人間を幸福にし、社會生活を向上せしめる全部の方法であると思ふ傾向は誤謬である。すべてのものに基礎條件と附帶條件とがある。日蓮主義は組織を生命化し、生命を組織化するところの原理である。從つてそれが外形にあらはれるときは最も秩序を重んずる主張となる。その點で舊弊の頑冥論と往々にして誤られるのである。

第六節

政治は宗教の手段であるといつたら宗教的獨斷と言はれやう。しかし乍ら、政治の理想はやはり宗教が目的とするところにあらねばならぬ。政治は宗教が目的とするところを實現しつ〻進む手段であつて、この手段を目的と見る哲學的解釋を以てすれば、政治は宗教の手段であると同時に目的である。宗教のみが人間文化の專制君主であつたとき宗教は他の人間の仕事であるところの政治や法律や產業や文藝や、そういふものを極度に卑しめたのだ。いまは、其反對に、この專制君主は、曾て卑しめたものどもによつて甚だしい卑しめを受てゐる。何故宗教が政治や產業や文藝を卑しめたか、分らずやの宗教家がこんな風に考へたのである。宗教は崇い神の仕事であるそうして政治や產業や文藝は卑しい人間の仕事であると自負し誤想した。これ自ら描いた妄想の雲に包まれた結果である。神の仕事はすなはち人間の仕事ではないか、正しき人間の仕事はすなち神の仕事ではないか。神の仕事を行ふものは人間のほかにありやうがないではないか。

政治は人間の仕事であるとして恐らく人間の仕事の中の一番大切なことであらう、政治の善惡良否は立どころに地獄極樂を地上に現出させる。墮落した政治によつて生み出される戰爭の多くは最も大規模なる修羅界の實現

であり、墮落した政治によつて爲される外交事件の多くは畜生界の實現である。生活の窮乏は餓鬼界そのものであり、貪婪飽くなき欲望の道ならざる追求に亂されて定るなき生命の濁亂はすなはち地獄界の實現である。かくの如き政治をはなれ空に理想世界の實現を夢みることは日蓮主義の如き現實主義の宗教には能はないところである。そこに又我々は文化としての日蓮主義を明瞭に認めるのである。

理想と現實との矛盾、そんなものは日蓮主義にない、理想だけでかため上げたものには現實に對すると片はじからその權威を潰されて了ふ、いはゆる現實暴露のなげきを見る。しかし乍ら、日蓮主義を構成する要素は、純理想ばかりで充たされてゐないのみならず、現實が我々に見せる醜惡よりももつと徹底した醜惡が加はつて成立してゐるところの一種の免疫體である。

これは日蓮聖人の人格を正しく見ることによつても了解が出來るのであるが、日蓮聖人は道德的にいふ善玉的人格ではなくて、あらゆる生命の綜合を實證する人格である。善とか惡とかいふものをそこに見る事が出來ない。日蓮聖人に僞りもある、惡口もある、嘲笑もある、慘忍もある、しかし乍ら、その大人格を傷けるに値するところの一個の不道德もないのである。

日蓮主義が政治原論となつて働くときは確に善に徹底し惡に徹底する、故に現實の醜惡に對する導力は最も確實である。

第七節

政治が文化實現の第一ステップであるとすれば、文化生活の促進に向つて努力するものは、從來封建政治や官僚政治時代の民衆のやうに、「知らしむべからず」の原則下に眠つてゐる事は勿論許さるべきでない、政治を理解しなければならぬ、政治を理解するとは、政治家となることでもなく、まして政治屋といふものになつて政治運動に參加することでもない、政治の目的を理解するのである。政治の目的を理解することは同時に、個人生活と團體生活の關係を理解し、社會心理、國民心理を構成するところの一個の確實なる道德的人格となることである。

宗教の信仰が一個人の煩悶の藥であつたり、業病平癒祈禱に過ぎなかつたり、普通の道學的教訓と選むなきものは、文化としての日蓮主義が聲を大にして論を起す對手ではない、世を安んじ國を安んずるを忠となし孝となすの「政治」、「道德」の一致を擴大し充實して、個人の我欲に始まり、個人の安逸に終るところの迷信信仰の殘骸を一掃する。其の主張するところは公明にして正大なる天下の輿論である、これ即ち神の聲にしてまた民の聲なるもの、これを新聞の論說として公衆の批判に訴へてもこれを議會の問題として議政壇上に論議しても、一歩も愆すること

のない主張の公明さを有つてゐる。日蓮主義は生命の宗教であるからすべての組織を生命の原則に則つて立てる。蓋し是以上自然なる方法は人間界にありえない、最も自然なるものはいつでも最も安全なるものである。

幕時代の法華信者なるものは紊りに奇矯の言を吐いて自ら快とした、大言壯語は佛家の常とは言ひ乍ら、世に法華信者の群くらい大言壯語の常習者はない、日蓮聖人の大言壯語は神をも人をも怖れしめ泣かしめる眞摯なる衷心の噴動であつたが、眞にかくの如き責任的なるものは後世に於て見る事が少く、いはゆる蓄音器的の大言は實力を以て立つ文化の世界が開けて來るに從つて甚だ有毒なるものとなつた。日蓮主義が正當なる廣布と發達を長期にわたつて阻害され來つた理由の一つに數へることが出來る。

日蓮聖人の文化主義は醉つぱらひの痰呵の如きものを以て宣傳廣布をはかるべきものではなかつた。「日蓮が法門は大智慧のものにあらざれば圖りがたし」、深秘な論理と直觀の上にある。論理と直觀は不用意に無見當に振り廻すべき狂人の木刀ではない。現代の如き生活改造、文化進展の世界的機運が內からも外からも天からも地からも呼び迎へられて、こゝに未曾有の過渡期の大危期を展開した。かくの如き世の爲めの潛勢文化であつたのである。

第八節

人生の原理は必ず一元でなければならぬ。善惡の two unity……眞善美の three unity……たゞひとつの綜合と圓融との中に生命の原理は流れてゐる。

善惡一元の綜合生活は先づ我々の道德的觀念に強い刺戟を與へるものである。善なる王國と惡なる王國とは我等の心性の中に吳越の如く戰つてゐる二つの王國ではなくて全く渾然たる分化である。日蓮主義はこの一元論の上に立つて生命の自由と進展とを直視する。これが藝術となりえない譯はない。藝術は表現である What の問題ではなくて How の問題を取り扱ふ表現の術である。然らば根本の一元一乘を如何に生活の上に表現するかといふ日蓮主義は偉大なる藝術でなければならぬ。

生活が藝術化する問題は藝術家の理想であるけれども、日蓮主義の生活は本來そのまゝ生ける藝術でなければならぬ。その實例實證として我等は日蓮聖人の生活を知つてゐる。これ位眞實に徹底して藝術的生涯を展開した偉人は少い。日蓮聖人の傳記文章は或は小說となり戲曲となり歌唄謠詩となり傳說となり繪畫となり彫刻となり音樂となりすべての藝術と同化してゐる。すなはちそれが眞實の生活であつたと同時に偉大なる藝術の生活であつたからである。

その如何なる經路と色彩とによるかは別問題として、とにかく日蓮主義の原理と同化した生活は必ず藝術的價値

に豐富であるべき論理がある。それは、一元の生命がさま〳〵に表現し活躍する姿であつて、これは生命の正しい調和だからである、調和は美の源泉である、しかも、根底深き大なる綜合と圓融とは全くすべての美の寶藏である我等は藝術原理として日蓮主義を見る可能性を信ずる。最高の美は最高の眞實であらう、最高の眞實は最大の美であらう。日蓮主義は眞實眞理の躍きを以て藝術の榮光とするものである。

第九節

日蓮主義が生活の原理である爲には我々はその中から經濟生活及び產業生活の原理を見出さねばならぬ。現代の信仰となるもの、現代の哲學となるもの、それから現代の學となるものは、直接我等の生活を創造するに力あるものでなければならぬ。

生活の一面から見ると現代は產業の世紀である。今日の產業の興廢は直に國家及び社會の文化生活を左右するであらう。

日蓮主義の一念三千の哲理は綜合と統一の組織であるが、それが價値の世界に働くときには、價値創造の哲學となる。

價値創造の哲學はそのまゝ產業の原理である。人生は靈的價値の創造であるが、產業は物的價値の創造である。劣等なる價値より優等なる價値を創り出す組織を我々は產業と名ける。その產業の世紀に於て日蓮主義文化の光揚を念ずるものは、日蓮主義の原理を同じく文化の世界に還元して、我等の產業生活經濟生活を率ゆる原理としたい。「下和の璞みがいて光りを放つ」は神秘の產業である。「砂子に黃金を代ゆる」も產業の神秘である。因を以て果を獲るは生產の原理である。物質界の因果の法則も靈界の因果の理法も、要するに創造せんがため進化せんがための約束である。生命の宗教は創造と進化の宗教である。創造と進化の宗教は偉大なる宇宙の產業原理でなければならぬ。「法華經には資生業等皆順正法」と記してある。また、一切世間治產業皆與實相不相違背とも書いてある。この偉大なる價値創造の哲學を以て人間生活の生產にも經濟にも適用すべき運命は佛陀によつて遺されてゐる。さてこれを何うして現實の組織に復活蘇生せしめるかについては、それ〳〵その專門學の上から論じなければならぬ

第十節

宗教は宗教の爲めにあるものではない、道德も道德の爲めにあるものではない、藝術でも學問でもすべての文化は文化の爲めにあるものではない。ひとしく人生の爲めにあるのである。曾て文化であつたものも人生を離れる時

は最早いつでも文化ではない、宗教が人生を離れて宗教それ自らの爲めの存續を圖り道徳や藝術が人生を離れてそれら自らの獨立の存在に努めるときには最早そこに文化としての價値も權威もないのである。飽くまで生命の流れに從つて流動し、人生の帆と共に走るところに文化の價値はある。

法華經は我々にとつて古典であらうか、本化上行は我々にとつて過去の神話であらうか、法華經が古典であり本化上行が神話であるならば、そしてそれ以上の何物でもないならば、日蓮主義は現代將來の文化とはなり得ないものである。然しながら、法華經が古典でなく、本化上行が神話の偶像でない證拠は歴然たるものである。

法華經は本化上行を生んだ、本化上行は永遠に生きてゐる生命である。本化上行の生命が一切の生命に向つてその同化の翼々延ばすことそれが日蓮主義の文化運動である。

地上一切の生命は末法唯一の靈の中心たる本化上行の生命に向つて同化しなければならない。そこに個人の完成があり國家社會民族一切の文化生活の光明がある。

本化上行の生命が現代文化の上に炳として輝きわたるときに、その光明が一切の生活組織に透入して限なきときに、日蓮主義は宗教でなくて文化である。一切の生活のノルムである。

其に到達する日蓮主義の文化的復　組織が現代の要求である。（序　說―了―）

大正十一年四月廿五日印刷
大正十一年四月廿八日發行

定價金拾錢

著作兼發行人　星野武男
印刷人　別枝長夫
印刷所　天業民報社印刷部

東京下谷鶯谷
振替東京一二三五　天業民報社代理部

取次所

65
5

終